

未来 農業 DAYS



アワード部門

令和6年度農山漁村女性活躍表彰

農林水産大臣賞ほか



コンペ部門

第9回大地の力コンペ

賞金総額 100万円

2025年
3月6日(木)

14:00 - 18:30
(13:30開場)

会場 東京大学弥生講堂
一条ホール

東京都文京区弥生 1-1-1
東京大学農学部内

主催 未来農業 DAYS 実行委員会
農山漁村男女共同参画推進協議会
一社) 未来農業創造研究会

後援 農林水産省

未来農業 DAYS について

未来農業 DAYS とは

「未来農業 DAYS」は、若手農林水産業者や女性農林水産業者の優れた取組や農林水産業に関心のある方々の革新的なアイデアを表彰することで、未来の農林水産業を担う中心となる若者や女性の取組等を広く社会に発信することを目的としています。

今年度は初めての取組として、「未来の農林水産業に向けて ～これまでの挑戦、これからの挑戦～」と題し、取組発表を行うと共に、令和4年度農山漁村女性活躍表彰 若手女性チャレンジ部門 受賞者と本年度の受賞者が課題や夢を語り合うトークセッションを行います。また、後半より「第9回大地のカコンペ」のファイナルプレゼンテーション上映および審査の結果を発表します。

未来農業 DAYS は、農林水産業の「これまで」を知り「これから」を創造するための新しい仕掛けです。

タイムテーブル

未来農業 DAYS 2025 タイムテーブル

- 13:30 開場
- 14:00 開会挨拶：納口るり子 実行委員長
- 14:30 頃 農山漁村女性活躍表彰
表彰式 および 審査委員講評
- 15:45 頃 フォーラム（取組み発表・トークセッション）
未来の農林水産業に向けて ～これまでの挑戦、これからの挑戦～
- 17:00 頃 コンペ部門
概要説明
第9回大地のカコンペファイナリストプレゼンテーション
コンペ結果発表
- 18:30 頃 閉会挨拶：納口るり子 実行委員長
閉会

ご挨拶

主催者よりご挨拶



◆未来農業 DAYS 実行委員長◆

納口 るり子 氏

筑波大学生命環境系 名誉教授 / 一社) 未来農業創造研究会 代表理事

このたびは未来農業 DAYS へご参加いただき、誠に有難うございます。本会は、農業の楽しさ・奥深さをご理解いただくための一つの取り組みとして開催するものです。

これまでの農林水産業界は、分かりにくい・排他的であるとみられることが多かったのですが、実際に農林水産業に携わる方々は、それぞれ、農林水産業を国民の皆様により深く理解して頂こうと、様々な取り組みをされています。食や農林水産に関する話題が、マスコミ等を通じて、消費者の皆さまの目にふれることも多くなりました。近年、このように、国民の皆様の視線が、ようやく農林水産業に向けられるようになったことを、感慨深く思います。

本会では、アワード部門として、第一線で活躍されている農林水産業関係者の方々の顕彰、コンペ部門として、今後、農林水産業を活性化されるであろう応募者の方々の発表と表彰をおこないます。

本日の未来農業 DAYS の開催により、農林水産業と関連産業が、さらに輝かしい発展を遂げることを願っております。

農林水産省よりご挨拶



杉中 淳 氏

農林水産省経営局長

「未来農業 DAYS」の開催を心よりお慶び申し上げます。

本年1月に開会した第217回通常国会での施政方針演説において、石破茂内閣総理大臣は「若者や女性にも選ばれる地方をつくる」、「若者や女性が「楽しい」と思えるような新しい出会いや気づき、そこから生まれる夢や可能性が重要」と表明されました。

農林水産業を発展させ、農山漁村を活性化していくためには、女性や若者など多様な視点や価値観を持つ方々の活躍が不可欠です。

本日、農山漁村女性活躍表彰を受賞される皆様は、高い志と周囲の方を巻き込み取組を実現する行動力を有する方々です。深く敬意を表するとともに、心からお祝いを申し上げます。また、持続可能な社会の実現に向けアイデアを結集した「大地の力コンペ」参加の皆様の英知を称賛いたします。

「未来農業 DAYS」を通して、皆様の功績を発信していくことが、全国の女性や若者にとって新たな一歩を踏み出す後押しとなることでしょう。そして、その一歩が我が国の農林水産業の未来につながっていくことは論を待ちません。

「未来農業 DAYS」に参加される皆様の方々の益々のご活躍を期待しています。

令和6年度農山漁村女性活躍表彰

1. 目的

今年で8回目となる「農山漁村女性活躍表彰」は、女性が農山漁村でいきいきと活躍できる環境づくりに資することを目的に、農林水産業及び農山漁村の活性化、農林水産業経営や制作・方針決定への女性の参画推進、次世代リーダーとなりうる若手女性の農林水産業への参入など女性活躍推進のために優れた活動を行っている個人や団体の方々を表彰しています。

2. 令和6年度 表彰部門

令和6年度 農山漁村女性活躍表彰では、以下の6部門を表彰いたします。

A. 女性地域社会参画部門（個人）

農山漁村の女性が中心となった地域の農林水産業の振興や、農山漁村の活性化のための活動の中長期に渡り積極的に実施している個人の取組。

B. 女性地域社会参画部門（組織）

農山漁村の女性が中心となった地域の農林水産業の振興や、農山漁村の活性化のための活動の中長期に渡り積極的に実施している組織の取組。

C. 女性起業・新規事業開拓部門

農山漁村の女性が中心となり、女性ならではのアイデア等に基づき、地域資源を活用した起業活動や輸出、スマート農林水産業、農福連携等の導入により女性が農林水産業経営に積極的に参画し、新規事業・部門等を設立し概ね5年以内に経営上の成果を上げている取組。

D. 女性活躍経営体部門

キャリア形成・能力開発に関する取組や、育児・介護等に関する就業規則等の整備など女性が働きやすい環境整備に取り組むとともに経営方針等に女性が参画し、実践している概ね直近5年以内の農林水産業を営む経営体の取組。

E. 若手女性チャレンジ部門

農林水産業の振興及び農山漁村の活性化のための活動等を積極的に実施し、かつ、今後地域の農林漁業の発展を担い、リードすることが期待される概ね45歳未満の女性による概ね直近5年以内の取組。

F. 地域子育て支援部門

農林漁業者及び農林漁業団体が自ら行う、又は、農林漁業者及び農林漁業団体が都道府県・市町村・民間団体等と連携し行う、農山漁村の特色・課題を踏まえた地域の子育て支援、児童・学童の健全な育成に資する取組。

審査委員



◆審査委員長◆

岩崎 由美子 氏 福島大学 行政政策学類 教授

●経歴●

埼玉県生まれ。早稲田大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得退学。住民主体の計画づくり、農山村地域活性化、震災からの地域復興、農村女性起業などを研究。主な著書として、『食と農でつなぐ福島から』（岩波書店、共著）、『小さな自治体の大きな挑戦－飯館村における地域づくり』（八潮社、共著）、『成功する農村女性起業』（家の光協会、共編著）など。



五條 満義 氏 東京農業大学国際食農科学科 准教授

●経歴●

全国農業会議所に8年間勤務後、1997年に東京農業大学専任講師。助教授を経て准教授。日本農業法学会副会長。伝統野菜の大蔵大根の復興を応援。

著書に『家族経営協定の展開』（筑波書房）、『中国の大学と農村は今』（東京農大出版会）、『家族経営協定最前線』（全国農業会議所）など。過去に内閣府男女共同参画会議専門委員、政府の第2～4次の男女共同参画基本計画策定作業に加わる。



小川 理恵 氏 一般社団法人 日本協同組合連携機構（JCA）基礎研究部長 主席研究員

●経歴●

一般社団法人日本協同組合連携機構（JCA）基礎研究部長 主席研究員。博士（農学）。1997年に、前身である社団法人地域社会計画センターに入会。総務課長、企画調整室長を経て研究職に職種転換、現在に至る。研究分野は地域づくりと女性活動。

主な著書に『魅力ある地域を興す女性たち』（農文協 2014年）、『JA女性組織の未来 躍動へのグランドデザイン』（共著 家の光協会 2021年）、『ダイバーシティJAだれもが活躍できる地域をめざして』（共著 全国共同出版 2024年）



平田 真一 氏 有限会社 平田観光農園 代表取締役

●経歴●

1965年8月長野県生まれ。広島大学法学部卒業後、落合経営会計事務所に入社。その後、有限会社平田観光農園に就職。2006年7月に同取締役社長に就任、川西地区果実協働加工組合代表就任。2010年7月に長野県中野市に、株式会社果実企画を設立、取締役就任。2016年12月に株式会社イチコト設立、取締役に就任。2020年4月に川西地区果実協同組合加工株式会社を設立、取締役に就任（すべて現任）。全国農業会議所が事務局を務める経営者組織「農のふれあい交流経営者協会」副会長。



原 ゆきこ 氏 税理士法人 共同経営センター 社員税理士

●経歴●

1968年生まれ。東京都出身。東京大学農学部農業経済学科卒業。夫の仕事に伴い、1998年より香川県在住。主婦業に専念した後、会計事務所に入社。学生時代よりの憧れだった農業経営者との触れ合いの中で、税理士資格の取得を決意。現在、顧問先は農業法人が多くを占めている。日本政策金融公庫の上級農業経営アドバイザー試験合格者、香川県新規就農・農業経営相談センター登録専門家として様々な農業経営者の相談に応じている。



池本 博則 氏 株式会社ユニークピース 代表取締役社長

●経歴●

徳島県出身。2003年株式会社マイナビ入社。2016年同社執行役員 地域活性事業部長となり、2017年8月より農業情報総合サイト『マイナビ農業』を立ち上げる。日本の農業振興について官民双方へのサービス提供を通し取り組んだ。その後2023年5月末でマイナビを卒業し、2023年6月より株式会社ユニークピースを創業。現在も農業をテーマとした民間企業の事業開発や官公庁自治体における農業施策の支援など幅広く農業振興に取り組む。

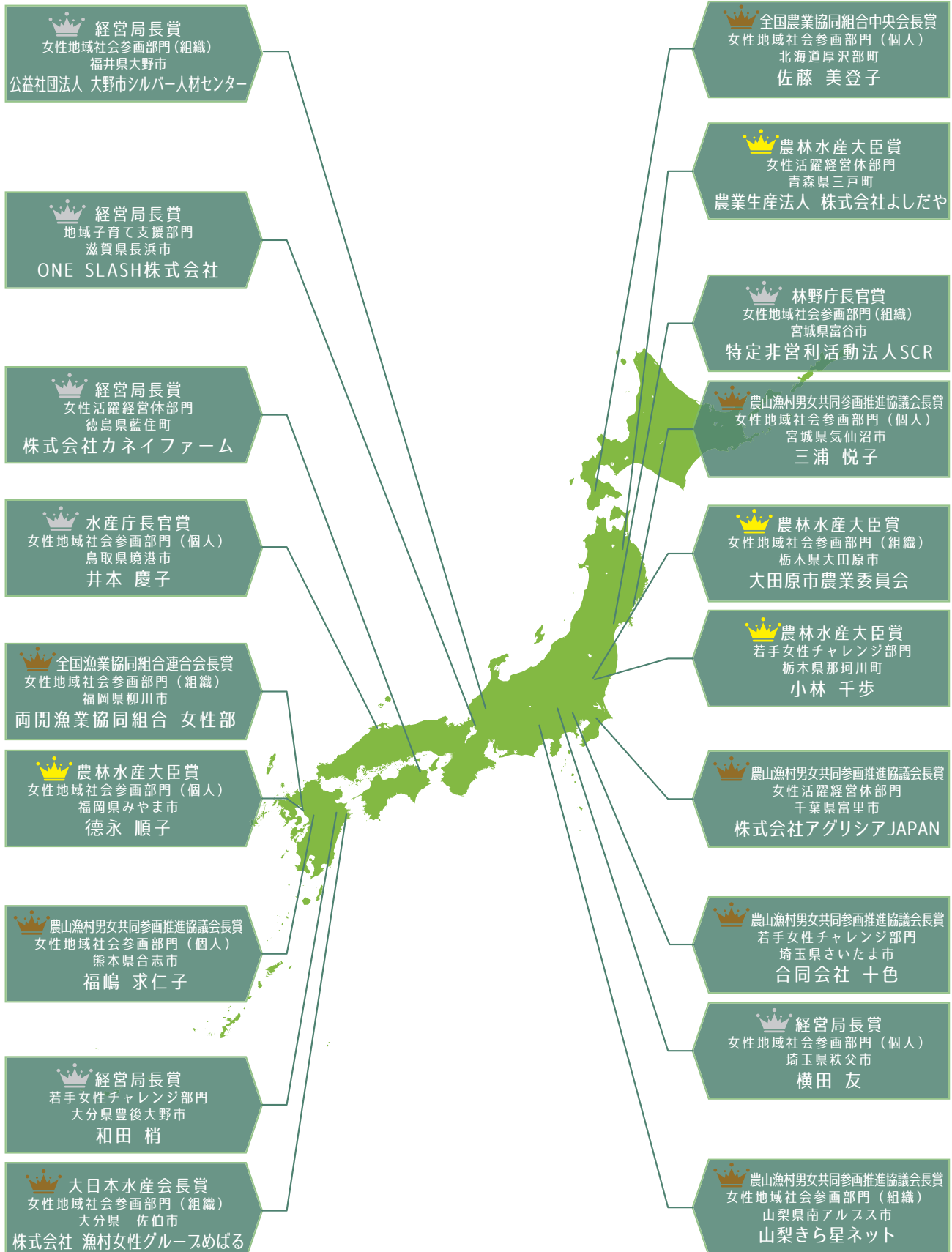
受賞者

受賞個人・団体一覧

- A：女性地域社会参画部門（個人）
- B：女性地域社会参画部門（組織）
- C：女性起業・新規事業開拓部門
- D：女性活躍経営体部門
- E：若手女性チャレンジ部門
- F：地域子育て支援部門

賞の種類	賞の名称	部門	県名	所在地	個人または団体名
 最優秀賞	農林水産大臣賞	A	福岡県	みやま市	徳永 順子
		B	栃木県	大田原市	大田原市農業委員会 (代表 荒井 一夫)
		D	青森県	三戸町	農業生産法人 株式会社 よしだや (代表 吉田 清華)
		E	栃木県	那珂川町	小林 千歩
 優秀賞	経営局長賞	A	埼玉県	秩父市	横田 友
		B	福井県	大野市	公益社団法人 大野市シルバー人材センター (代表 小野田 理夫)
		D	徳島県	藍住町	株式会社 カネイファーム (代表 矢野 正英)
		E	大分県	豊後大野市	和田 梢
		F	滋賀県	長浜市	ONE SLASH 株式会社 (代表 清水 広行)
	林野庁長官賞	B	宮城県	富谷市	特定非営利活動法人 SCR (代表 村上 幸枝)
水産庁長官賞	A	鳥取県	境港市	井本 慶子	
 優良賞	全国農業協同組合 中央会長賞	A	北海道	厚沢部町	佐藤 美登子
	全国漁業協同組合連合 会長賞	B	福岡県	柳川市	両開漁業協同組合 女性部 (代表 田中 恵美子)
	大日本水産会長賞	B	大分県	佐伯市	株式会社 漁村女性グループめばる (代表 小谷 晃文)
	農山漁村男女共同参画 推進協議会長賞	A	熊本県	合志市	福嶋 求仁子
		A	宮城県	気仙沼市	三浦 悦子
B		山梨県	南アルプス市	山梨きら星ネット (代表 齊藤 眞知子)	
D		千葉県	富里市	株式会社 アグリシア JAPAN (代表 津田 乃梨子・津田 壮一郎)	
E	埼玉県	さいたま市	合同会社 十色 (代表 サカール 祥子)		

受賞者マップ



👑 農林水産大臣賞 A. 女性地域社会参画部門（個人）



徳永 順子（福岡県 みやま市）

2002年に農業委員となり、2016年に福岡県内で女性として2番目となる農業委員会会長に就任。遊休農地を解消するため、景観作物である菜の花栽培を推進、その菜の花を利用した「菜の花オイル」を地元JAへ働きかけて開発。また、2013年には市の環境審議会委員に就任し、生ごみをメタン発酵するバイオマスセンター「ルフラン」（2018年建設）で生成される液肥の農業への活用を進め、資源循環のまちづくりに寄与。さらに、2022年からは、土地改良区理事に就任し、農地中間管理機構関連農地整備事業を活用して、全国屈指の約60ヘクタールの大規模区画整備に取組み、地元特産品「山川みかん」の産地承継に尽力。

👑 農林水産大臣賞 B. 女性地域社会参画部門（組織）



大田原市農業委員会（代表：荒井 一夫）（栃木県 大田原市）

大田原市農業委員会では、地域農業の発展と女性農業者の社会参画の推進に向け、2021年に女性農業委員で組織する「チームあゆみ」を結成し、現在6名で活動している。初心者向けの農機具講習会やSNSを活用した農業経営スキルアップ講座、農業女子との意見交換会など、女性農業委員ならではの視点でイベントを企画・開催し、男女の差なく多様な意見や価値観を尊重する意識の醸成、女性が参画しやすい環境づくりに取り組んできた。このような「チームあゆみ」の活動をアピールするとともに、女性団体への農業委員候補者推薦の働きかけを行ったことで、女性農業委員の登用数は着実に増加しており、大田原市農業委員会全体の活性化も図られている。

👑 農林水産大臣賞 D 女性活躍経営体部門



農業生産法人 株式会社よしだや（代表：吉田 清華）（青森県 三戸町）

にんにくに特化し生産・加工・販売・飲食店経営まで手がけている農業法人である。2002年に創業、2007年に法人化し、2018年には現社名に変更し代表取締役に吉田清華氏が就任した。自身の出産・育児の経験から、1時間単位で取得できる休暇制度や短時間勤務制度、育児介護休業制度を整備するとともに、作業を機械化し効率的な作業環境を整備したり、研修による人材育成などにも取り組んできた結果、従業員の約7割が女性となっている。また、農福連携にも取り組み、それぞれの特性に合わせて個々の能力が発揮される職場環境をつくっている。代表は青森県農業経営士にも認定され地域農業を牽引する存在となっている。

👑 農林水産大臣賞 E. 若手女性チャレンジ部門



小林 千歩（栃木県 那珂川町）

非農家から大規模米農家に嫁ぎ、結婚当初は子育てに専念していたが、3人目の子供の認定こども園の入園を機にいちご栽培を開始。「完熟にこだわったおいしいいちごを消費者に直接届けたい」という思いからインターネット販売を積極的に導入することで、売上を大幅に伸ばした。また、近隣保育園のいちご狩りの園場提供や中学生の職業体験受け入れを行い、農業の魅力を次世代に伝える活動にも積極的に取り組んでいる。小林氏自身でも県主催の女性農業者アグリビジネスセミナーや交流会に参加するほか、自らアポイントをとり先進農業者を訪問するなど、積極的に知識・情報を収集し、経営マネジメントスキルの向上や、経営の見直し改善につなげている。

👑 経営局長賞 A. 女性地域社会参画部門（個人）



横田 友（埼玉県 秩父市）

義父の農業経営を継承するため、秩父市栃谷で就農した。2004年に秩父市初の女性農業委員に就任し、2006年からは県女性農業委員の仲間づくりのため女性農業委員協議会の設立に尽力した。現在は、全国農業委員会女性協議会会長、埼玉県女性農業委員協議会会長、秩父市農業委員会会長等の要職を兼任している。地域では、遊休農地解消に積極的に取り組む他、栃谷ふるさとづくりの会事務局長として都市住民との交流や農村の景観形成、ヘアリーベッチによる土づくり等精力的に活動し、農業委員の活動を含めた年間の活動日数は300日を超える。更に、女性農業委員登用推進活動を積極的に行い、秩父市農業委員の女性委員割合を約3割にまで引き上げた。

👑 経営局長賞 B. 女性地域社会参画部門（組織）



公益社団法人 大野市シルバー人材センター（代表：小野田 理夫）（福井県 大野市）

大野市シルバー人材センター（以下、大野市SC）では、1996年より作業請負等以外に大野市SC会員自らが経営を担う独自事業に力を入れており、農村地域の立地を生かし、農業生産から加工、販売まで13の独自事業で6次産業化に取り組んでいる。6次産業化分野に参画する女性は7割で、生産面はもちろんのこと加工や販売など幅広い分野を担っており、女性の力が原動力となっている。道の駅内テナントへのテイクアウト専門の飲食店出店や、街歩きグルメでの新商品開発にも積極的に取り組んだ結果、独自事業の販売金額は、令和元年以降5年連続して全国1位となり、令和5年度は6,678万円（うち6次産業化関連6,468万円）となった。この大野市SCの取り組みは、女性・高齢者の豊富な経験や生産・加工技術を生かし、やりがいのある場づくりとなっていると共に、大野市農業の活性化にも貢献している。

👑 経営局長賞 D. 女性活躍経営体部門



株式会社 カネイファーム（代表：矢野 正英）（徳島県 藍住町）

矢野正英代表は水耕レタス栽培を主力に、販売会社や直営レストラン、福祉事業所を設立し積極的に事業展開している。妻の望美取締役は看護師の経験を活かし、女性を中心とした従業員を雇用している。また、代表が運営する福祉事業所の利用者を（株）カネイファームに派遣するといった農福連携に取り組むとともに、（株）カネイファームに外国人技能実習生を受入れ、誰もが働きやすい環境整備と生産体制のシステム化に取り組んだ。「女性が働くためには、子育てとの両立が不可欠」という思いで、パート職員を正社員にするため、短時間正社員や家族休の導入など、女性目線で働きやすい労働環境を整備した。また、望美氏は、看護現場の管理体制を農業分野に応用することで、生産体制をシステム化し、定植率、生育状況、廃棄率、責任者がスマートフォンでも分かるようにしたと同時に、年間を通じてグラフ化・データ化し、品質管理の「見える化」を進めている。

👑 経営局長賞 E. 若手女性チャレンジ部門



和田 梢（大分県 豊後大野市）

農事組合法人の解散危機を乗り越え、2018年に大分県内の集落営農法人で初の女性代表者として就任。以来、オリジナル米袋の作成やSNSを活用した情報発信、ふるさと納税返礼品の提供など革新的な取り組みで法人を再生させ、地域の農地を守るという使命感のもと、水田オーナー制度の導入やもちつき体験の開催など、都市部との交流を促進し、地域の活性化に大きく貢献。さらに先を見据えた農業改革への挑戦として、スマート農業の導入、ウイスキー用麦の栽培委託、もち麦マカロンの商品化等新たな地域農業の発展に向けた取り組みも積極的に行っている。

👑 経営局長賞 F. 地域子育て支援部門



ONE SLASH 株式会社 (代表: 清水 広行) (滋賀県 長浜市)

地元の幼馴染 5 人が「RICE IS COMEDY(米作りは喜劇だ)」をコンセプトに、琵琶湖最北端に位置する滋賀県長浜市西浅井町で 2016 年に設立したグループであり、兼業農家として米作りを通して一次産業のネガティブなイメージを変え、地域社会全体を盛り上げることを目指している。街中で羽釜と薪を使って炊飯し、おにぎりを振る舞う「ゲリラ炊飯」や、田植えや稲刈りを体験できる農業イベント、子ども食堂へのお米の提供や、学校での講演を通して、食育や農業の楽しさ、地域の魅力を広め、次世代へ繋げることを活動の意義としている。SNS や YouTube を通じて情報発信し、地域や農業の価値を高めながら、未来の担い手を育成する基盤を築いている。

👑 林野庁長官賞 B. 女性地域社会参画部門 (組織)



特定非営利活動法人 SCR (代表: 村上 幸枝) (宮城県 富谷市)

自分たちの住む地域の森林を守る必要性を多くの人たちに知ってもらうために、森林整備、木育活動(間伐材を利用した木工教室)、ミツバチの住む里山づくりなどの活動を展開している。ミツバチの住む里山づくりでは、里地里山を借り、休耕田を耕起し、ヤブになっている里山の林縁を刈り払い整備することで、クマとヒトとの緩衝地帯を創出し、ミツバチの巣箱をクマによる獣害からも守っている。企業ボランティアとともに、蜜源となる花の確保を目的として休耕田に作付けた植物が春から夏にかけて咲き誇り、地域景観の改善にもつながっている。また市内中学校の環境教育の場としても活用しており、農福連携事業として次のステージへと展開している。

👑 水産庁長官賞 A. 女性地域社会参画部門 (個人)



井本 慶子 (鳥取県 境港市)

2004 年に境港に帰郷、水産庁の出先機関にて臨時職員として勤務したことがきっかけとなり、以来 20 年間水産業界での仕事を続けている。当初は行政の立場として、その後の 17 年間は漁業者として漁業における資源管理に関わるとともに鳥取海区漁業調整委員や水産政策審議会の特別委員を務めてきた。現在は山陰旋網漁業協同組合に所属し、参事として組合業務全般に携わっている傍ら、地域の教育現場等でこれまでの経験を活かした魚食普及活動等も行っており、現在の役職や立場はこれまでの業務に対する姿勢が認められた結果であり、水産業界での女性活躍のロールモデルとなっている。また水産庁の「海の宝! 水産女子の元氣プロジェクト」に参加し、女性活躍を推進している。

👑 全国農業協同組合中央会長賞 A. 女性地域社会参画部門 (個人)



佐藤 美登子 (北海道 厚沢部町)

1985 年、夫の家業を継ぐ形で営農を開始するとともに、JA 新はこだて厚沢部地区女性部部員として活動を開始し、味噌・漬物などの加工品づくり・販売活動、伝承料理の継承活動に取り組んでいる。また、町の女性農業者同士の交流の場を定期的に設け、JA や町内部の委員会活動を通して得たノウハウを他の女性農業者へ積極的に共有するとともに、女性農業者が持つ不安や悩みの解消に取り組むなど、女性組織の中心的存在として活躍している。厚沢部町農業委員、JA 新はこだての女性部部長、厚沢部町総合計画策定審議会委員、北海道農協米対策本部委員等を歴任し、地域農業の発展と男女共同参画社会の推進に貢献している。

👑 全国漁業協同組合連合会長賞 B. 女性地域社会参画部門（組織）



両開漁業協同組合 女性部（代表：田中 恵美子）（福岡県 柳川市）

両開漁業協同組合女性部では多くの部員がノリ養殖業の重要な担い手として、自家海苔の生産加工に専念しなくてはならない状況であり、活動の幅を広げるきっかけを探していた。1983年頃から板海苔生産の過剰供給により価格が下落し、生産した海苔の原価割れ、焼却処分など苦しい状況となった。そのような中、女性部員たちは、苦勞して生産した海苔をどうにか有効活用する方法がないか考え、ノリ原藻を用いた佃煮を製造し、付加価値向上を図ると共に板海苔以外の新たな商品として販売する取り組みに挑戦。この挑戦を通じ、女性が技術を磨き、自分たちの意見を反映した商品開発、製造、事業化を成功させ、女性のやりがいと能力を発揮できる環境をつくりあげた。そして、様々な人との繋がりが活動の幅を広げ、結果としてノリ生産者に対する経済的な支援、地場産業と雇用の創出を実現することが出来た。

👑 大日本水産会長賞 B. 女性地域社会参画部門（組織）



株式会社 漁村女性グループめばる（代表：小谷 晃文）（大分県 佐伯市）

「漁村女性グループめばる」は、家族が獲った美味しい魚をもっとみんなに食べてほしい（魚食普及）、高く売りたい（魚価向上）、漁村女性が働く場所を作りたい（女性活躍推進）、地域を元気にしたい（地域活性化）の4つを目的に、2004年に漁師の妻達が集まりスタート。最初はトラックに水槽を乗せ、70km離れた大分市内で活魚を販売しましたが、「活きが良く美味しそうだけど、捌けないから。」との声を聞き、加工業へ活動をシフト。漁家に伝わる郷土料理「ごまだし」に目を付け瓶詰めを商品化。県や全国の品評会で最優秀賞を受賞し、全国販売に至る。代表は2代目の男性に交代するも、作り手や企業理念など活動内容が変わらないため社名もそのまま活動中。

👑 農山漁村男女共同参画推進協議会長賞 A. 女性地域社会参画部門（個人）



福嶋 求仁子（熊本県 合志市）

2004年に就農し、アスパラガスや水稻などを栽培。JA 菊池の合志地区女性部長を務めたことを契機に合志市農業委員に就任し、現在6期目。5期目には女性として初めての合志市農業委員会会長を務め、現在に至る。農地を維持・管理していくためには女性視点での意見が必要だと考え、常に発信することを意識しつつ実践している。その他、熊本県及び合志市農業女性アドバイザーやくまもと農業委員女性委員の会長など、数多くの役職を積極的に引き受け、任務を全うしてきた。さらには、子どもたちへの食育活動や農産物直売朝市、食文化継承活動においても大いに活躍し、地域農業の発展や女性の地位向上に貢献し続けている。

👑 農山漁村男女共同参画推進協議会長賞 A. 女性地域社会参画部門（個人）



三浦 悦子（宮城県 気仙沼市）

夫の両親からフロイラー経営の継承を打診され、1985年に就農を決意。2001年に認定農業者となり経営を主導し、夫と二人三脚で安定した経営を実現した。同年、本吉町（現気仙沼市）農業委員会初の女性委員に（合併後は市初の女性委員）、2005年には町議会議員となり、女性の視点や発想を生かして町政に参画した。さらに、みやぎアグリレディス21（県内女性農業委員による組織）の副会長として女性委員の育成に力を注ぐとともに、県内女性農業委員が不在の市町村をゼロにするなど男女共同参画の推進に貢献した。また、宮城県農村生活グループ連絡協議会の会長も歴任し、女性のネットワークづくりや社会参画活動をけん引した。

農山漁村男女共同参画推進協議会長賞 B. 女性地域社会参画部門（組織）



山梨きら星ネット（代表：齊藤 眞知子）（山梨県 南アルフス市）

本団体は、山梨県が農村リーダーを育成するために実施した研修会の修了生を母体として、2007年3月に設立した女性農業者グループである。県内全域に30代～80代の会員40名が在籍しており、山梨県の農業者間のネットワークを広げ、会員相互の資質向上と親睦を図ることを目的に活動している。活動内容としては、研修会や勉強会の開催、先進地事例視察の実施、イベントへの出展など、多岐にわたり、農村女性リーダー育成を活動的に行っている。山梨県は地域ごとに農業環境に特色があり、果樹を主軸とする地域、高原野菜や穀物に力を入れる地域、花き生産や酪農が盛んな地域など、多種多様である。このため、地域の課題を解決するために、本団体では地域内外での情報交換を通じてお互いの理解を深めている。

農山漁村男女共同参画推進協議会長賞 D. 女性活躍経営体部門



株式会社 アグリア JAPAN（代表：津田 乃梨子・津田 壮一郎）（千葉県 富里市）

株式会社アグリア JAPAN は、親元就農し経営移譲を受けた津田乃梨子氏と夫の壮一郎氏が2021年に共同代表となり設立。乃梨子氏は経理・販売関係を主に、夫は生産管理を主に担当している。従来の露地野菜に加え2022年よりいちご生産を新規導入し、付加価値を付けた販売をするため直売所の設置と加工品の商品化を行い、事業拡大とブランド化を進めた。女性スタッフを積極的に雇用し定着・活躍できる組織を作るため、育児・介護等に配慮した柔軟な勤務制度、働きやすい職場環境を整え、研修参加や資格取得を支援、やりがいを持って仕事に取り組めるようにしている。収穫体験や地域のいちご生産者等と連携した取組や多様な情報発信で地域の農業振興に貢献している。

農山漁村男女共同参画推進協議会長賞 E. 若手女性チャレンジ部門



合同会社 十色（代表：サカール 祥子）（埼玉県 さいたま市）

十色は「畑はエンターテインメント！」がコンセプトの農業法人であり、「見沼田んぼを活用した農業で、様々な人が活躍する場をつくりたい」という思いが一致したことがきっかけで女性3人で起業。とうがらし専門農園「十色とうがらしファーム」事業と、「十色の農業体験」事業を行っており、見沼田んぼの環境を次世代に残すため、有機 JAS 認証取得に向けた栽培を行っている。また事業を通じてたくさんの方が見沼田んぼの農業に触れる機会を作っている。誰もが働ける環境づくりとして、障害福祉や生活困窮者支援の団体と連携した業務委託や臨時雇用、短期短時間のパート職員の雇用など、さまざまな働き方を進めている。

農山漁村女性活躍表彰 講評

審査委員長 岩崎 由美子 氏



「農山漁村女性活躍表彰」は、農林水産業及び農山漁村の活性化、農林水産業経営や政策・方針決定への女性の参画推進、次世代リーダーとなりうる女性の農林水産業への参入などの優れた活動を行っている個人や団体を表彰し、女性が農山漁村でいきいきと活躍できる環境づくりに役立つことを目的としています。

令和6年度事業では、16道府県及び9市町村、17団体から33事例の推薦と、自薦による応募が2事例あり、計35事例の応募がありました（C女性起業・新規事業開拓部門への応募はなし）。審査委員6名が審査基準に基づき厳正な選考を行い、結果的に以下の最優秀賞（農林水産大臣賞）が決定されました（F地域子育て支援部門は受賞なし）。

A女性地域社会参画部門（個人）では、福岡県の徳永順子さんが受賞されました。徳永さんは、2002年に農業委員になり、2016年に農業委員会会長に就任しました。会長就任後は、毎月1回農業委員会総会後に勉強会を実施して委員一人一人の疑問点や意見を吸い上げ、任期満了した委員にはエピソードを添えた手紙を渡して労をねぎらうなど男性委員を巻き込んで皆が楽しく活動できる体制をつくりあげました。また、菜の花栽培による遊休農地の解消、「菜の花オイル」の開発のほか、市の環境審議会委員として生ごみを活用してバイオマスセンターで生成される液肥の農業への活用を進めるなど、資源循環のまちづくりにも寄与されています。さらに、2022年からは土地改良区理事に就任し、農地中間管理機構関連農地整備事業を活用して、全国屈指の約60ヘクタールの大規模区画整備に取組み、地元特産品「山川みかん」の産地承継に尽力されています。

B女性地域社会参画部門（組織）では、栃木県の大田原市農業委員会（代表：荒井一夫さん）が受賞されました。栃木県では、昨年の「とちぎ女性農業委員の会」に引き続いて同部門の受賞となります。大田原市農業委員会では、2021年に女性農業委員で「チームあゆみ」を設立し、初心者向けの農機具講習会やSNSを活用した農業経営スキルアップ講座、農業女子との意見交換会など、女性農業者の「今の声・現場の声」を反映した事業に取り組んできました。その活動の背景にあったのは「女性農業者への支援をさらに手厚いものにしたい」という委員の思いであり、女性農業者はもとより男性農業者からも賛同や共感の声が集まっているそうです。地域計画作成においても、話し合いが男性農業者のみの参加に偏ることがないよう女性農業者にも声掛けをして参加を促し、ファシリテーターの役割も務めるなど、農業委員会活動の活性化にも大きく寄与しています。

D女性活躍経営体部門では、青森県の農業生産法人株式会社よしだや（代表：吉田清華さん）が受賞されました。にんにくに特化した同社の経営を支えている従業員は7割が女性であり、管理職にも女性を起用するなど女性活躍の取り組みが積極的に展開されています。吉田さんご自身の出産・育児の経験を生かし、1時間単位で取得できる休暇制度や短時間勤務制度、育児介護休業制度を整備するほか、効率的な作業環境を整備し、各種免許や資格を取得する研修制度を充実させるなど、働く人それぞれの特性に合わせた職場づくりにも取り組んできました。その結果、「一緒に働きたい」という人が集まるようになり、雇用労働力の安定的確保につながっています。吉田さんはワーキングホリデー制度によってニュージーランドのふどう畑で働いた経験があり、いろいろな国の人が一斉に作業する大規模農場での仕事は、シンプルで合理的な作業環境のあり方を実践的に学ぶ機会となったそうです。

E若手女性チャレンジ部門では、栃木県的小林千歩さんが受賞されました。「農家の嫁になって憧れの田舎ライフを」という夢をもっていた小林さんは、念願かなって大規模米農家に嫁いだものの、休みなくずっと働いても利益が少ないという現実に直面しました。農作物の価値は適正であるべきだ、そして消費者に農業をもっと身近に感じてもらいたいと思うようになった小林さんは、いちご栽培にチャレンジします。「完熟にこだわったおいしいいちごを消費者に直接届けたい」という思いからインターネット販売を導入することで売上を大幅に伸ばし、近隣保育園のいちご狩りや中学生の職業体験受け入れなど農業の魅力を次世代に伝える活動にも積極的に取り組んでいます。「引きこもり農家の嫁」だったかつての自分が、いちご栽培を通して「よくばりでハッピーなバリキャリ農家の嫁」になり、さらにこれからはどんな新しい「農家の嫁」になれるのか心躍らせておられるそうです。

以上の農林水産大臣賞のほかに、15事例が経営局長賞や水産庁長官賞、林野庁長官賞、全国農業協同組合中央会長賞、全国漁業協同組合連合会長賞、大日本水産会長賞（今年度より新設）などを受賞されました。とくに今年度は、A女性地域社会参画部門（個人）で、農業委員会の会長を務めるなど地域社会で重要な役割を担っておられる方が複数応募されており、どなたを最優秀賞とするか選考過程で頭を悩ませました。委員会で議論を尽くした結果、環境まちづくりや土地改良区理事として活動の幅を広げておられる永さんを大臣賞として選出しましたが、農林水産省経営局長賞を受賞された横田友さん（埼玉県）、農山漁村男女共同参画推進協議会長賞を受賞された福嶋求仁子さん（熊本県）・三浦悦子さん（宮城県）も、農業委員会会長として活躍されているほか男女共同参画や地域活性化に向けて目覚ましい取り組みをされていることをここに記しておきたいと思います。上記で紹介した事例以外にも素晴らしい活動が数多くあり、農業・農村の持続性を高める上で女性たちの取り組みはかけがえのない価値を生み出しており、こうした取り組みを広く発信していくことの重要性を改めて認識いたしました。

最後に、本表彰事業に取り組んでくださった方々、また、各県や市町村、関係機関等のみなさまに厚くお礼を申し上げ、審査講評とさせていただきます。

大地の力コンペ概要

1. 大地の力コンペが目指すもの

課題多き農業ではありますが、これまでも、そしてこれからも非常に重要であり、大きなパワーと魅力を持った産業であります。その力は現代社会を悩ませる問題を解きほぐることができるかもしれません。そのような、農業の力やそのフィールドを通してさまざまな社会課題の解決を目指す動きを「アグリ+(アグリプラス)」と名付けました。大地の力コンペは「アグリ+アイデア」を表彰するとともに、未来に向かって大きくはばたくお手伝いをするを目的とします。

また、未来農業の中心となる若者・女性が活躍できる事業やアイデアにスポットをあてるとともに、異分野からの知恵も取り上げながら農業の裾野を広げることを目指します。

2. 第9回 大地の力コンペ テーマ

第9回テーマは「農業 x 地域創生」です。地域経済のベースを支える一次産業。そのなかでも農業は生活の根幹といえます。地域の活性化には農業の活性化が欠かせないと言っても過言ではないでしょう。そこで、今回の大地の力コンペでは、地域の活性化と農業の発展が一体となるような革新的なアイデアを求めています。どのようにすれば農業が地域の活性化に寄与できるのか？もしくは、地域がどのように農業の発展に寄与できるのか？ わたしたち自身と次世代に、よりよい環境を実現できるようなアイデアを募集しました。

本コンペティションでは、新たな地域資源の開発・地域コミュニティの強化・地元の特産品を活用したビジネスモデル・農業技術の進化を利用した地域再生など、様々な視点からのアイデアを歓迎します。

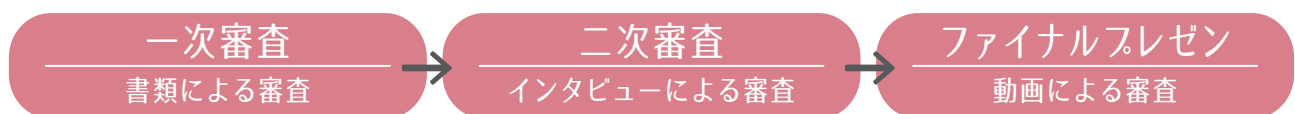
さらに、そのアイデアを他の地域に広げる工夫も考えてください。小さな取り組みが各地に広がることで、日本全体が活性化することでしょう。

皆さんのアイデアで日本を元気にしましょう！

3. 募集内容

1. みんなが活躍：年齢や性別・国籍・文化・宗教・価値観・障がいの有無などに関わらず、誰もがそれぞれの個性を活かして活躍できる仕組みを作り、誰も置いてきぼりにならない社会をつくるアイデア
2. 命をつむぐ：食や農の分野で、持続可能な発展につながるアイデア
3. 地域を元気に：地産地消など、地域に根差した食文化や農業遺産を利用しながら、地域を活性化するアイデア
4. 環境を守る：農業と地球環境は密接に関わり合っています。その諸問題を解決するアイデア。
5. 明日を創る教育：環境に配慮した消費行動をとれる消費者や、つくりてを育成するアイデア
6. パートナーシップ：異分野から、農業の発展や持続可能性につながるアプローチ
7. ミライの道具：環境問題・食品ロスなどの諸問題に先端技術を用いて取り組むアイデア
8. そのほか：広く社会的な課題を農業のチカラで解決に導くアイデア

4. 審査方法



社会的インパクト 農業だけではなく社会全体をより良くするものかどうか

革新性 これまでにないワクワクするようなアイデアであること

事業性 実現可能性があり、持続性があること

ファイナル審査員



納口 りり子 氏 一般社団法人 未来農業創造研究会 理事長 / 筑波大学 名誉教授

●経歴●

1957年生 神奈川県小田原市出身。蜜柑農家の次女として生まれ、北海道大学農学部農業経済学科卒業。1979年から農林水産省の試験研究機関（東京・つくば・新潟県上越市）で21年間、先進農業経営者の経営管理や農家間の組織化などについて研究を行う。2000年から筑波大学にて、農業経営学の教育と研究に従事し、2022年3月定年退職。現在は、日本農村生活学会副会長、NPO法人農業支援センター顧問、(株)日本食農連携ビジネス顧問などを務める。



山田 敏詩 氏 こと京都株式会社 代表取締役

<https://kotokyoto.co.jp/>

●経歴●

1962年、京都府京都市生まれ。大阪学院大学商学部を卒業後、約8年のアパレル企業勤務を経て就農。2002年、有限会社竹田の子守唄を設立、のち2007年にこと京都株式会社に組織変更を行う。2014年にこと日本株式会社、15年にこと京野菜を設立。2017年6月より(公社)日本農業法人協会の5代目会長。日本食農連携機構理事、京都府農業経営者会議会長などを兼務する。著書に『脱サラ就農、九条ねぎで年商10億円』がある。平成30年度 農林水産祭天皇帝受賞。



藤井 滋生 氏 一般社団法人 未来農業創造研究会 副代表理事 / 株式会社アグリインキュベーター 代表取締役社長

<https://agriincubator.co.jp/>

●経歴●

1976年 宮崎大学農学部卒業、同、ジャスコ株式会社（現イオン株式会社）入社。イオンリテール株式会社取締役、関東カンパニー支社長、アグリカルチャーPT担当を経て2009年7月イオンアグリ創造株式会社を設立し代表取締役社長に就任。2014年 農産物生産・加工・流通のイノベーションの実現を目指し(株)アグリインキュベーターを設立。傍らで農業活性化のための勉強会「八重洲塾」を毎月開催。



福永 庸明 氏 イオンアグリ創造株式会社 代表取締役社長

<https://www.aeon.jp/agricreate/>

●経歴●

1969年 兵庫県出身。
1995年4月 ウエルマート株式会社（現マックスバリュ西日本株式会社）入社後、同農産商品部長を経て2009年7月にイオンアグリ創造株式会社 生産本部長兼管理本部長に就任。
2012年4月より、同社の代表取締役社長に就任。現在に至る。



及川 智正 氏 株式会社 農業総合研究所 代表取締役会長 CEO

<https://nousouken.co.jp>

●経歴●

昭和50年1月2日東京生まれ。1997年東京農業大学農学部経済学科卒業。
学生時代から農業への危機感を覚え、会社員を6年間経験後、農業界へ転身。自分で農業を3年、八百屋を1年実践し、その経験を活かし、2007年に現金50万円で農業総合研究所を設立。起業後12年で取扱高100億円を達成。平成28年東証マザーズ(現東証グロース)へ上場。多数のメディア出演や講演活動、農林水産省の委員、大学の講師も務める。農業界の急成長企業、そして、農業ベンチャー初の上場企業として全国から注目を浴びている。趣味はタフダンス。



西辻 一真 氏 株式会社マイファーム代表取締役

<http://myfarm.co.jp>

●経歴●

1982年福井県生まれ、2006年京都大学農学部資源生物科学科卒業。大学を卒業後、1年間の社会人経験を経て、幼少期に福井で見た休耕地をなんとかしたい!という思いから、「自産自消」の理念を掲げて株式会社マイファームを設立。その後、体験農園、農業学校、流通販売、農家レストラン、農産物生産など、独自の観点から農業の多面性を活かした種々の事業を立ち上げる。2010年、戦後最年少で農林水産省政策審議委員に就任。2016年度 総務省「ふるさとづくり大賞」優秀賞受賞。2021年6月、学校法人札幌静修学園の理事長に就任。2022年「JCI JAPAN TOYP」(第36回青年版国民栄誉賞) 農林水産大臣奨励賞受賞。将来の夢は世界中の人が農業(土に触れていること)をしている社会を創ること。

大地の力コンペ – ファイナリスト

第9回大地の力コンペファイナリスト

本年度のテーマ「農業 x SDGs」に対して、多方面からの考察や広い視点からのアイデアが集まりました。農業と環境の持続化は誰にとっても非常に重要なテーマです。

ファイナリスト以外のアイデア・取り組みはどれも素晴らしく、環境負荷の低減・アッパサイクルなどの未利用品や廃品の利用・農業そのものの持続可能性追求など、さまざまな活動を行なっていることがわかりました。

今回のファイナリストは学生6組・社会人1組の全7組。未来農業 DAYS では、ファイナルプレゼンとして事前に作成していただいた動画による審査を行います。

トマト残渣をゴミから栄養資源へ



土壌研究研修班

愛知県立安城農林高等学校 <https://anjonorin-h.aichi-c.ed.jp>

●エントリー内容●

トマトの茎や葉などの副産物を活用し、フラックソルジャーフライ（BSF）の幼虫を飼育することで、高栄養価で持続可能な養殖魚用飼料を生産するアイデアです。この飼料を活用した養殖から出る魚の排泄物を野菜の肥料に利用することで、農業と養殖を結びつけた循環型の生産システムを構築します。農業廃棄物削減、環境負荷低減、そして地域資源の有効活用を実現することを目指します。

放置竹林で農業を支える ～放置竹林と費用削減を目指して～



諫早農業高校 生物工学部

長崎県立諫早農業高等学校 <http://www.news.ed.jp/isahaya-ah/>

●エントリー内容●

日本各地で放置竹林が増加している現状にある。このことは、ただ土地に侵入して生活を妨げるだけでなく、土壌の保持力低下による土砂災害が問題となっている。そこで、本活動は竹をパウダー状にし、馬鈴薯の病気である馬鈴薯そうか病の抑制に利用する活動である。地域農家や大学、企業と連携し実証実験を繰り返している。このように長崎県の馬鈴薯栽培に導入していき、地元農家の経営負担軽減、地域農業の活性化を到達目標とした活動である。

食品残渣の農業活用による食品ロス"0" 目標



諫早農業高校 生物工学部食品ロス活用班

長崎県立諫早農業高等学校 <http://www.news.ed.jp/isahaya-ah/>

●エントリー内容●

現在の食糧自給率は約38%で低い一方、食品ロスは約472万トンと自給率に比べて、多い傾向にある。長崎にある離島対馬は、「日本の縮図」といわれおり、島内の自給率は約40%であるが、家庭から多くの食品ロスが発生しており、ほぼ全てを焼却処分されている。そこで、私達の取り組みは、対馬市と連携しながら、家庭から食品ロスを回収、堆肥化し、栽培や畜産に活用し、次の食料を生み出す。「カーボンニュートラル」から発想を得た、例えるならば「フードロスニュートラル」活動だ。

規格外金時豆を用いたピネガー作りと規格外野菜の漬物作り



更別農業高等学校加工分会A

北海道更別農業高等学校 <http://www.sarabetsunougyou.hokkaido-c.ed.jp/>

●エントリー内容●

私たちが学ぶ更別村は金時豆の生産量が日本一ですが、形や色が悪いといった理由で規格外品の割合が多く、有効活用の研究を更別村役場より依頼を受けていました。この規格外金時豆を用いた加工品として、今か9年前の先輩が本校の圃場で発見した「酢酸菌」を用いて酢の製造に成功をしました。この金時豆酢と地域家橋詰さんの畑より廃棄されている「白菜」を用いた漬物作りを行うことにしました。

農薬の泡散布でSDGs に貢献



FLORA HUNTERS

青森県立名久井農業高 <https://www.nakui-ah.asn.ed.jp/>

●エントリー内容●

農薬の飛散による健康被害・水質汚染・環境汚染は昔から大きな社会課題となっている。農薬を泡にすることで飛散防止を抑制するとともに、農薬の効果を維持・増大させる可能性を研究している。また、泡状にする界面活性剤をマイクロ抽出の天然由来にすることで、より一層の汚染防止・環境保護へとつながる。

空き家活用のアップサイクル農業



カクノウ株式会社

<https://www.kakunou.com/>

●エントリー内容●

空き家を農業ができる室内環境にリノベーションします。廃棄する建材などを利用した小型水耕栽培キットを開発し、空き家の窓際に設置するだけで室内農業環境にできます。育てられる野菜は400種以上あり、家主に委託される空き家周辺に住む住民が室内農業の栽培管理をしてくれるビジネスモデルです。具体的にはサススク型で貸農園ならぬ「空き家農園」です。空き家のメンテナンスも野菜づくりも簡単にできて、誰もが喜ぶ空間ビジネスをつくります。

水田の多数回中耕除草で農業の諸問題を解決



瀬戸南高校 PioneerR.G.

岡山県立瀬戸南高等学校 <https://www.setomina.okayama-c.ed.jp>

●エントリー内容●

江戸時代に確立していた、田植え後の水田で稲と稲の間を何度も中耕する「多数回中耕除草」をスマート農業技術により現代によりみえらせることで農業の諸問題を解決する。高度な技術や多大な労力が必要な有機農業を誰にでもできる技術にすることで担い手を確保でき、肥料、農薬を使わないことで環境、作業にも負荷が少ない。自動操舵システムを活用することで作業量が大幅に減らすことができる。絶対嫌気性であるメタン生成菌の活動を弱め水田からのメタンガス発生を防ぐことができる。高付加価値の米を生産することで収益を向上させることができる。

その他の受賞者

未来シーズ賞 & 研究躍進賞

惜しくもファイナリストから漏れたチームの中から、これからの発展に期待して「未来シーズ賞」を、これまでの研究がより進歩したアイデアには「研究躍進賞」を授与いたします。

農業体験イベントによる棚田の魅力発信と関係人口の増加の促進



農業研究活動団体 QSIP 棚田班

九州大学 <https://www.instagram.com/qsip2021>

●エントリー内容●

福岡県糸島市・佐波の棚田を持続的に保全するため、小学生のいる家庭を対象とした通年の農業体験ツアーを企画、実施する。田植えから稲刈りまでの一連の農作業と、泥遊びや餅つきといった子どもたちが楽しめるイベントを組み合わせたツアーによって、1年間を通して棚田に足を運んでもらう。そして、棚田の価値や農業の楽しさ、魅力の発見を通して、継続的に棚田に関わる人口を増やしていくことを目的としている。さらに、世代や興味に合わせた棚田への関わり方を提案し、棚田と人々を繋げる役割も担う。



地域資源「バショウ」を活用した資源循環・環境保全型農業



果樹プロジェクトチーム

愛媛県立大洲農業高等学校 <https://ohzu-ah.esnet.ed.jp>

●エントリー内容●

脱プラを目指し、果実袋のセロハンを芭蕉和紙に代替し、使用後に土壌中に還元することで炭素増加を図れる。バショウには、無機成分が豊富に含まれているため、企業と連携した有機肥料の開発により、廃棄物の焼却・原燃料利用に伴うCO2排出量の削減につながった。バショウは成長が早く、1本あたり20kgの二酸化炭素を吸収し、固定する力があるため、それを利用することでゼロエミッションシステムの構築が図れた。



もったいない規格外トマトで真の美味しい豚肉を追求

渥美農業高校 動物科学部

愛知県立渥美農業高等学校 <https://atsuminogyo-h.aichi-c.ed.jp>

●エントリー内容●

これまで4年間、愛知県田原市の規格外トマト活用に向けた取組を展開してきた。3年目には規格外トマト給与で豚肉中のイノシン酸（旨味成分）が増加した。4年目になり、イノシン酸数値でなく「人が感じる美味しさ」を追求するため官能検査を実施した。官能検査の結果、規格外トマトを給与した豚肉のほうが味と食感に関して高評価をいただいた。これまで約300kg以上の規格外トマト活用を実現し、廃棄による環境負荷低減に貢献できたといえる。



ミニトマトの生産・販売における食品ロス削減

園芸科 施設野菜

愛知県立安城農林高等学校 <https://anjonorin-h.aichi-c.ed.jp>

●エントリー内容●

私たちは、ミニトマトの食品ロス削減を目指し、生産と販売の両面で改善を行いました。裂果の原因を解消し品質を向上、規格外品を活用した地元飲食店とのコラボ商品「トマシライス」を開発、訪問販売で地産地消を推進しました。また、裂果トマトを鶏の飼料として「トマシエッグ」を商品化し、廃棄量を大幅に削減。環境負荷を抑えつつ、地域と連携した持続可能な農業を実現しました。



ご協力

第9回大地のカコンペ協賛企業

第9回大地のカコンペは以下の協賛企業・団体様のご協力により運営しています。（五十音順）

アグリグリーン株式会社 / イーサポートリンク株式会社 / イオンアグリ創造株式会社
イオン九州株式会社 / 株式会社アグリインキュベーター / 株式会社果実堂
株式会社ショウナン / 株式会社ドール / 株式会社農業総合研究所
株式会社ミームデザインズ / 住化農業資材株式会社 / 豊通食料株式会社
ネポン株式会社 / 農業生産法人 こと京都株式会社 / 古谷乳業株式会社
ベルグアース株式会社 / 有限会社妙義ナバファーム



住化農業資材株式会社



未来 農業 DAYs

主催：未来農業 DAYs 実行委員会

共催：農山漁村男女共同参画推進協議会 & 一般社団法人 未来農業創造研究会

後援：農林水産省

○未来農業 DAYs

Web: <https://www.mirainogyodays.org/>

Facebook: <https://www.facebook.com/mirainogyodays/>

○農山漁村男女共同参画推進協議会

Web: <https://www.nca.or.jp/support/farmers/common/>

○一般社団法人 未来農業創造研究会

Web: <http://awable.org/>

Facebook: <https://www.facebook.com/awable.org/>

□総合事務局□

運営主体：株式会社マイファーム